

島原半島の災害地名について

(元)九州地方整備局雲仙復興事務所 田村圭司^{※1}、前田昭浩^{※2}、水田貴夫^{※3}、荒金恵太^{※4}
 (現) ^{※1}近畿地方整備局六甲砂防事務所、^{※2}九州地方整備局河川部、
^{※3}福岡国道事務所、^{※4}都市局公園緑地景観課
 株式会社 建設技術コンサルタント 古賀省三、○増田考造

1. はじめに

災害地名は、先人たちが過去に災害が起こったところを子孫に伝承するための一つの警告として位置付けられている。よって、災害地名が残されているところは災害の危険性を内在している地区であると言える。本稿では、島原半島において検討を行った災害地名とその分布に関する特徴について報告する。

2. 災害地名の整理

検討を行うにあたり、まず既往文献から、災害地名の整理を行った。本検討では、楠原祐介著の「地名用語源辞典」をベースに地元の郷土誌なども参考にしながら、災害地名を整理した。整理にあたっては、「洪水・浸水地名」、「津波・高潮地名」、「崩壊地名」、「火山噴火地名」の4種類に分類して整理した。「崩壊地名」は土砂災害に関連するものとして、以下「土砂災害地名」として表記する。

表-1 抽出・整理した島原半島の主な崩壊地名の例

地名	読み	地名意味
赤兀	アカハゲ	アカは酸化で赤色をした、ハゲは(掃く)には崩壊地形。
宇土	ウド・ウト	土砂崩壊し(崖地)した所の意
樫木山	カシノキヤマ	カシ(傾)・ノキ(退・除)山の意で、崩壊した山
崩山	クエヤマ	表記文字の通り、山崩れした山。
古賀	コガ	「コガ」は「落とす。すべらす。ずらす。」ことを意味する「コカス」の転で、崩れ地名。
ホキ端、ホケ四郎	ホキ・ホケ	ホキ・ホケは「ほうけた所・崩れた処」など崩れ地を意味する。
柳	ヤナギ	ヤ(矢)・ナギ(薙ぎ)の転で、崩れ地名。

3. 島原半島における土砂災害地名の分布状況

島原半島における災害地名の分布状況を整理するにあたり、まず、「島原半島大字小字地名集覧」より、島原半島の小字地名とその読みをデータベース化し、先に抽出・整理した災害地名との整合を確認した。その際、災害地名とされた島原半島の小字名については、GISソフトを用いてその地区範囲をポリゴン化して整理した。また、長崎県砂防課が整理している災害報告から、土砂災害発生箇所をプロットし、災害地名との関連性について整理した。なお、土砂災害発生箇所のデータは、がけ崩れが昭和52年以降、土石流が平成3年以降、地すべりが昭和59年以降のデータを整理できた。

島原半島における「土砂災害地名」と土砂災害発生箇所の分布を図-1に示す。

この図からは、土砂災害発生箇所は、島原半島では、比較的海に近い沿岸部で発生しているのに対し、崩壊地名は、やや内陸側に位置する様子が見られる。その他には、土砂災害地名が雲仙岳中心とした放射状の直線上に並んでいる箇所が数か所あるなどの傾向が見受けられた。

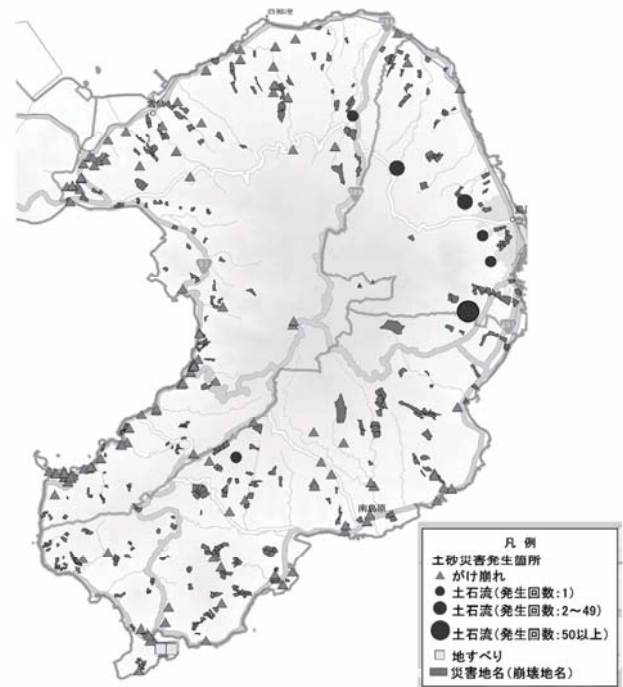


図-1 島原半島における土砂災害地名と土砂災害発生箇所の分布図

島原半島における土砂災害地名の分布について、数的整理を行った。島原半島の小字数 8,170 に対して、土砂災害地名は、392 であり、率で表すと 4.8%であった。また、土砂災害発生箇所においては、土砂災害地名の発生率が上がっていることを想定して率を出したところ、土砂災害発生箇所 110 箇所に対し、土砂災害小字名範囲で起こっているのは 6 箇所であり、率で表すと 5.5%であった。島原半島全体に対し約 1.1 倍と、やや上がった程度であった。これについては、先述したとおり土砂災害発生箇所と、土砂災害地名が残っている箇所の位置がやや違う傾向が見られることが原因と考えられる。

表-2 土砂災害地名率の比較表

	島原半島全体	土砂災害発生箇所
小字数	8,170	110
土砂災害地名数	392	6
土砂災害地名率(%)	4.8%	5.5%

4. 災害地名の特記すべき分布状況

(1) 活断層と土砂災害地名

千々石町北部と、布津町では、活断層沿いに、深層崩壊跡地が見られ、また、その下流は、土石流危険渓流になっている。また、その断層をなす斜面沿いに、「宇土」「崩」「ノキ」などの崩壊を意味する地名が並んでいるのが確認された。



図-2 千々石断層付近の拡大図

また、活断層がかかる小字数 264 に対し、土砂災害地名小字に活断層がかかる数は 17 であり、率で示すと 6.4%であった。島原半島全体に対し約 1.3 倍と、関連性がやや見られた。

表-3 活断層位置での崩壊地名率

	島原半島全体	活断層
小字数	8,170	264
土砂災害地名数	392	17
土砂災害地名率(%)	4.8%	6.4%

(2) 普賢岳と火山噴火地名

島原市の普賢岳東側には、「焼野」地名が数箇所存在した。眉山の下に見られる「焼野」「焼野尻」を除くと、同じような標高の位置に、「焼野」地名が存在していることを見ることができる。1792年に流出した新焼溶岩の先端位置に近い位置である。

5. おわりに

本調査では、土砂災害発生箇所と土砂災害地名との関係に深い相関は見られなかったが、活断層と崩壊地名の関係や、普賢岳東側の焼野地名など、興味深い結果が得られた。しかし現地において、地形や災害跡地調査による災害地名の検証、また、その地区に残る伝承等のヒアリングは行っていない。今後は、これらの調査を実施して、災害地名とされた地名の検証を実施し、関連性のあるものについては、周知して警鐘する必要がある。

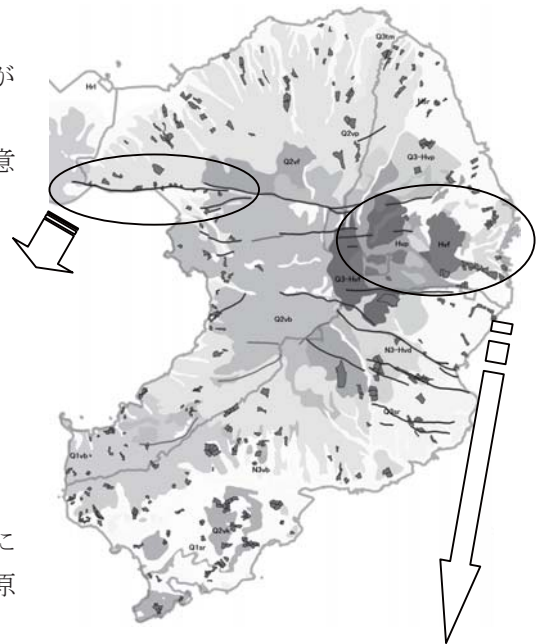


図-3 土砂災害地名と活断層の位置図



図-4 普賢岳東側に位置する「焼野地名」